

ごみの減量化にご協力ください

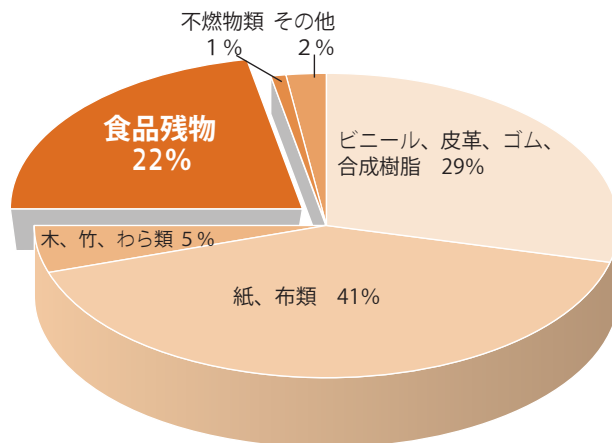
市は年2回、家庭から出た燃やすごみの成分検査を行っています。

令和元年度の調査結果（右図）を見ると、燃やすごみは、紙・布類が約4割、食品の食べ残しや野菜くずなどの生ごみとして処分される食品残物が約2割を占めています。

一般的に食品残物は水分を多く含んでいます。水分は燃やすのに不要である上、いざ燃やすとなれば多くのエネルギーが必要です。水分を減らすことは、コスト面や環境面（二酸化炭素排出量の削減）から考えても有効な取り組みです。

生ごみを減らすには？

- ・日頃から冷蔵庫や保管庫の整理整頓をする。
- ・食品は必要な量だけ購入し、作り過ぎや食べ残しをしないようにする。
- ・三角コーナーなどを利用して、水きりをする。
- ・乾燥させる（野菜、果物の皮や草など）。



燃やすごみの成分検査結果（令和元年度）

普段の暮らしの中で一人一人が、ごみの減量化に対する意識を持つことが大切です。再生利用できる紙は資源ごみに、また、生ごみを減らす取り組みなどを参考に、ごみの減量化にご協力ください。

問い合わせ

環境政策課 ☎ 23-3100



「魚市場（仮題）」（1933年 油彩）

©加納莞菴 市加納美術館蔵

解説

浜田市で教員を勤めていたころの作品。にぎわう市場や生きのいい魚、働く人々が勢いのいいタッチと鮮やかな色彩で描かれています。



※休館中も美術館から情報発信中。加納美術館公式フェイスブック（FB）をご覧ください。

加納莞菴（本名 辰夫）は1904年（明治37年）、今の安来市広瀬町布部に生まれました。市加納美術館は、莞菴の生家跡周辺に建っています。子どものころから絵を描くのが得意だった辰夫は、1926年（大正15年）から東京で本格的に西洋画を学びます。

1929年（昭和4年）に帰郷後は、安来市や浜田市で小学校の先生を勤めながら絵画制作に積極的に取り組みました。当時新進の画家たち

が中心となって設立した独立美術協会（※）の創設時のメンバーとして独立展の第1回（1931年）から出品し、入選を重ねていました。

辰夫は、次第に画家として本格的な活動を望むようになっていきました。（続く）

※独立美術協会には、20世紀初頭に生まれたフォービズム（野獣派）の激しい色づかいや筆づかいが特徴の影響を受けた画家が多く、莞菴もその一人です。

加納莞菴 人と作品① 「画家を目指して」

安来市加納美術館だより ☎ 36-0880

リニューアル工事のため
来年5月末まで休館中